

世紀末芸術の面影を残すアール・ヌーヴォー、アール・デコ、キュービズムといったアートの流れが、この都市で見ることができる。

今回の研修旅行で、楽しみにしていた一つに、このアール・ヌーヴォーの画家として有名なアルフォンス・ミュシャ(ムハ)の作品を見ること。ムハは、このチェコで生まれ、パリで有名になり、ニューヨークで成功したが、晩年チェコに戻り、商業ベースとなってしまったアール・ヌーヴォーを捨て、祖国・民族の為に仕事を行っている。

プラハ城内にある聖ヴィート大聖堂のあるステンドグラスは、他の物とは異なり、ムハらしい柔らかさの中にスラブ民族のところが表現されている気がした。又今回、見ることが出来なかったが無償で17年の歳月をかけ完成させた一千年の民族の栄光と苦悩を描いた「スラブ叙事詩」がモラフスキー・クルムロフ城内にある。(見たかった・・・)

中欧のなかで、互いに隣国と影響し合いながら出来上がったこれらの芸術様式の根底には、それ以前の装飾技術や民族の誇りが絡み合いながら出来たものだと思う。各城内や広場にある時計台や門扉に至る錬金術・金属加工技術の素晴らしさ・ボヘミアン・クリスタルなどのガラス加工技術、それらの一つ一つを取って見ても職人(民族意識)の誇りが、感じられる。こういった繊細な技法を駆使した装飾芸術が基盤となり、世紀末芸術と呼ばれるアートが生み出されたのでは、ないだろうか。

